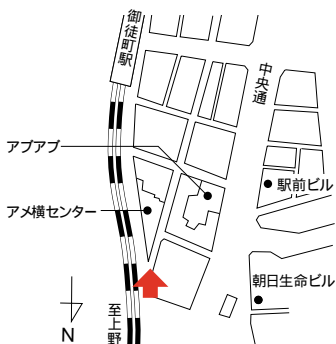




平成13年9月5日 富岡畦草 撮影

上と下の写真を見比べると右上に写っている「上野中通り」の名称が「上中(読み方は「うえちゅん」)」に変わっていることに気がつくだろう。このデザインにダンボールなどの素材を使った立体作品で有名な日比野克彦氏を起用したことから、「アメ横」に対するイメージを変えようとする商店街の意気込みが感じられる。さらに昨年11月には、アメ横商店街連合会に所属する約43店舗がホームページを開設(<http://www.ameyoko.net/>)。今はまだPR的な内容が多いが、今後は積極的に商品の販売を行なっていくという。このように「アメ横」は新しいものを取り入れながら伝統を守っていくようだ。

(文 渡辺邦博)



消えた街角 富岡畦草・記録の目シリーズ 昭和37年 安売りの街・アメ横」

昭和二十年の暮れ、上野駅の地下道には、千五百人もものホームレスが集まり記録によると毎日六人ずつ餓死したといっ。こうした状況の中で下谷地区引揚者更正会が生まれ、カド下や焼け跡に集団で露店を開いたのがアメ横の発端である。空腹のうえに甘味にも飢えていたため芋アメは貴重品で人がたかり「アメ横」の名の起りになったといっ。五百店にものほる大々的な闇市ともなれば当然占領軍兵士の小遣い銭稼ぎの場にも利用された。軍隊で支給される品物や、PXで仕入れた品物を持ち込めば、法外な値で引き取られ、彼らの懐を潤した。これがアメ横の名の起りといっ説もある。いずれにしても、昭和二十六年の露店整理法、昭和三十年の土地区画整理法に基づき取締り、東京から闇市が消える中、アメ横は体質改善しながら、何でも揃う安く、気軽な「マーケット」へ変身した。そして昭和五十七年、注目のつちにセンタービルを建設して近代化へ脱皮した。

文 富岡畦草とみおか (けいそう)
大正15年8月ニ重県生まれ 日本写真協会 日本写真家協会 自然科学写真協会などの会員